平成二十五年九月十三日(金)

第四四一回　史跡めぐり(バスツアー)

国宝「聖天山」と埼玉三偉人「荻野吟子」「渋沢栄一」を訪ねる

NPO法人　越谷市郷土研究会

第四四一回　史跡めぐり（バスツアー）

国宝「聖天山」と

埼玉三偉人「荻野吟子」「渋沢栄一」を訪ねる

● 日　時　平成二十五年九月十三日（金）　雨天決行

● 集　合　午前七時三十分　北越谷駅西口広場

● 参加費　六，五〇〇円　（バス・入館・食事・資料・保険・外）

● 案内者　（常任理事）篠原陸郎　（理事）山口正夫・森田三男

コース

北越谷駅―（東北道）―加須ＩＣ

① 行田郷土博物館（忍城跡）（行田市）

② 荻野吟子記念館　（熊谷市）

○ 昼食「和とう」　（熊谷市）

③ 妻沼聖天山歓喜院　（熊谷市）

④ 渋沢栄一記念館　（深谷市）

⑤ 渋沢栄一生家　（深谷市）

花園ＩＣ→（関越・外環）→北越谷駅

北越谷駅帰着１８：３０予定

埼玉県の国宝

（その一）　**歓喜院聖天堂**　（熊谷市）

（その二）　**金錯銘鉄剣**　（行田市）

埼玉稲荷山古墳出土品

（その三）　**太刀**　（さいたま市「歴史と民俗の博物館」）

銘　備前国長船住佐兵衛尉影光

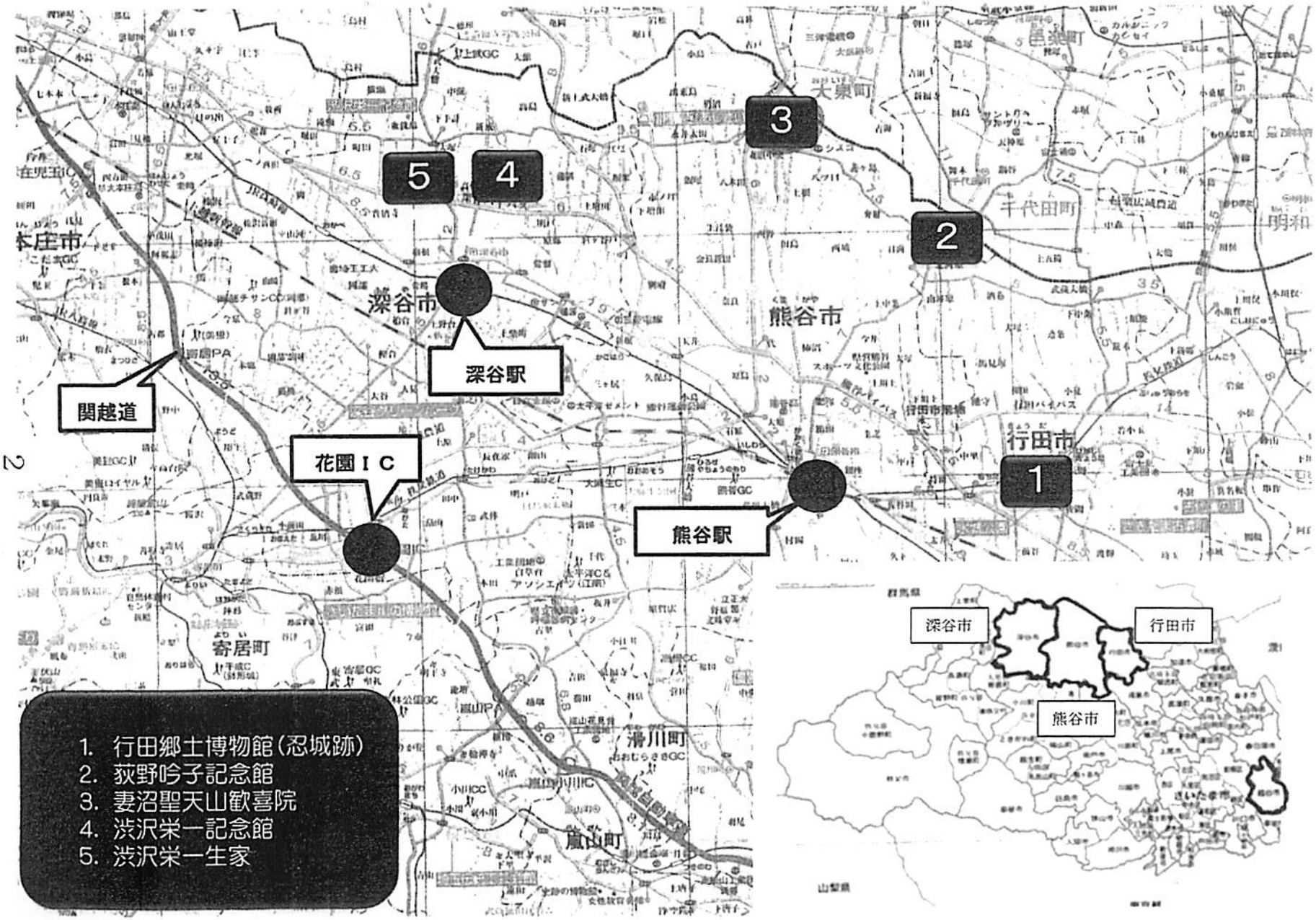
作者　進士三郎影政　嘉暦22年（1347）

（その四）　**短刀**　（さいたま市「歴史と民俗の博物館」）

銘　備州長船住影光　元亨3年（1323）

（その五）　**慈光寺経**　（比企郡ときがわ町「慈光寺蔵」）

法華経　一品経　阿弥陀経　般若心経


深谷駅
熊谷駅
関越道
花園ＩＣ
深谷市
熊谷市
行田市
寄居町
滑川町
嵐山町
大東町
千代田町
1
2
3
4
5
深谷市
行田市
熊谷市
1. 行田郷土博物館（忍城跡）
2. 荻野吟子記念館
3. 妻沼聖天山歓喜院
4. 渋沢栄一記念館
5. 渋沢栄一生家

1　行田郷土博物館（忍城跡）

●行田市郷土博物館

昭和六十三年、かつての忍城本丸跡に当時の櫓をモデルに再建したもので、各階は次のようなスペースとなっている。

二階　江戸時代の忍城と城下町
三階　明治から現在まで
最上階　展望台

●行田市の歴史と忍城

（中世の行田）

・平安時代までの貴族の時代（以上を古代という）から、戦国時代の動乱を経て、秀吉の天下統一までを中世の時代という。
・この時代武蔵地域には鎌倉時代、武蔵武士が活躍しその中から現在の熊谷市上之（かみの）を本拠地とする成田氏が台頭し、のちに忍城を築城することになる。
・忍城は、文明十一年（一四七九）頃までには成田氏により築城され、以後百年にわたり成田氏の支配する時代となる。
・天正十八年（一五九〇）、秀吉と小田原北条氏との戦いの中で石田三成らによる水攻めを受ける。
・この戦いにより忍城は開城し、成田氏百年の支配が終わり、関東に入国した家康の持ち城となる。

（近世江戸時代の行田）

・忍城が家康の持ち城となった天正十八年（一五九〇）に、松平家忠（いえただ）が派遣され、水攻めで傷んだ城の修復を行う。
・修復後の天正二〇年（一五九二）、家康の四男忠吉が入城し、関ヶ原合戦後（一六〇〇）清須（現愛知県）に移る。
・忍城にはその後、城番（城代の元にあって一定期間城の警護を担う役職で若手衆とも呼ばれる）が置かれ、周辺の河川改修や農業開発が積極的に行われた。
・寛永一〇年（一六三三）に松平信綱（江戸初期の川越藩主で幕府の老中、島原の乱・由井正雪の乱を鎮圧、明暦の大火を処理）が城主となり、同十六年になると、阿部忠秋（ただあき）が移り以後一八四年間阿部氏の時代が続く。
・文政六年（一八二三）、伊勢の桑名から松平氏が移封し、四八年あまりで明治を迎える。
・忍城は明治維新の戦火を逃れたが、明治六年に競売に付され、解体されてかつての面影はすべて失った。

（近・現代の行田）

・明治四年廃藩置県により忍藩から忍県となり忍城二の丸が県庁にあてられ、すぐまた同年に埼玉県に合同する。
・明治二二年成田町・行田町・佐間村と合併し、忍町が誕生。
・この忍町の時代は、まさに足袋に象徴される時代で、足袋は終戦後の需要減まで、行田の町を支えた基幹産業であった。
・昭和二四年に市制を施行し忍市に、同年即時行田市と改称。
・人口約八万三千人
・市の木　イチョウ

●水攻めと忍城

・忍城の歴史の中で、大きな変化となったのが豊臣秀吉による関東侵略である。天正十四年（一五八六）、関西では秀吉が政権を確立していた。天正十八年（一五九〇）三月、秀吉は北条方の関東へ進出を開始する。

・忍城主成田氏長は当然北条方としてこの豊臣軍を迎え撃つこととなる。本拠地小田原城を中心に防御を固め、籠城戦を行う北条方に対し、秀吉は小田原城を包囲するとともに配下の諸将を関東全域に展開し、圧倒的な機動力で各城を撃破していった。四月には江戸城などの武蔵の城が陥落、下総の諸城、川越城、鉢形城も続いて陥落した。そして、六月には残る北条方の城は小田原城と忍城のみとなっていた。

・忍城の陥落が理由は不明である。この時、忍城方は城主氏長をはじめとする主力部隊が小田原城に籠城中であった。忍城攻めを行った豊臣軍は石田三成を大将とし、長束正家、佐竹義家など関東勢が中心となり、後には徳川勢の後詰も導入された。この忍城攻めにおいて、水攻めが展開されたのは有名である。しかし、実際の所水攻めの規模、それによる実害の程度はよく分かっておらず、忍城が開城する決定的な戦略とはなっていないようだ。

・現在、行田市の指定史跡となっている「石田堤」は、この時三成によって築かれた堤の一部である。

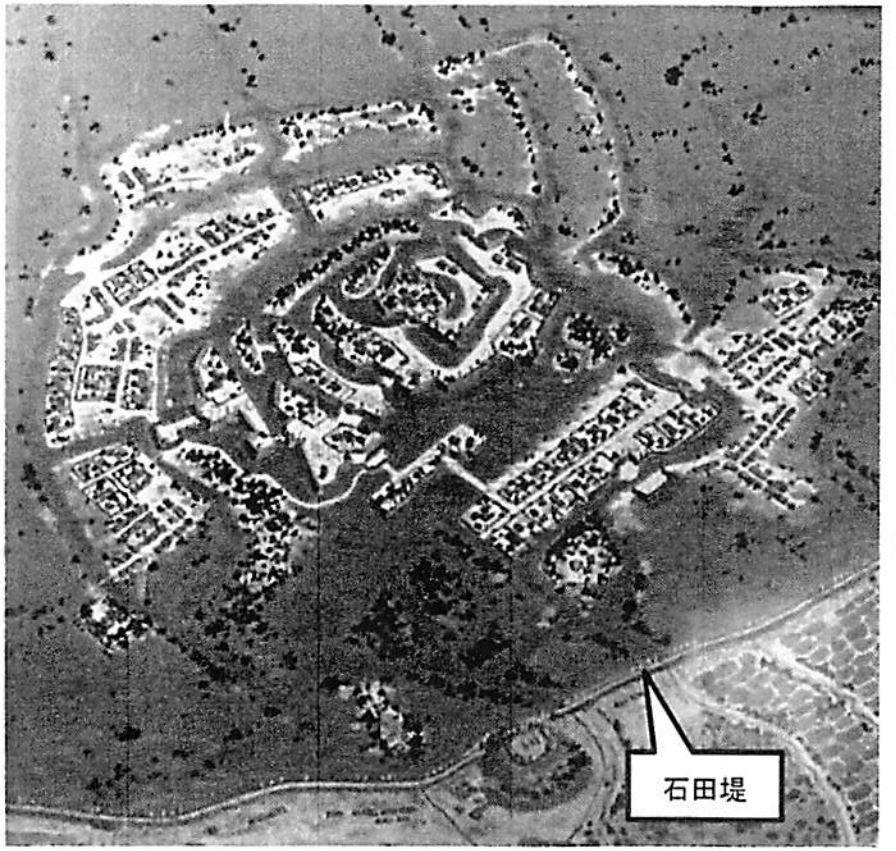
・小田原城開城後、忍城は遅れる事八日後に開城し、成田氏も城を出る事となった。

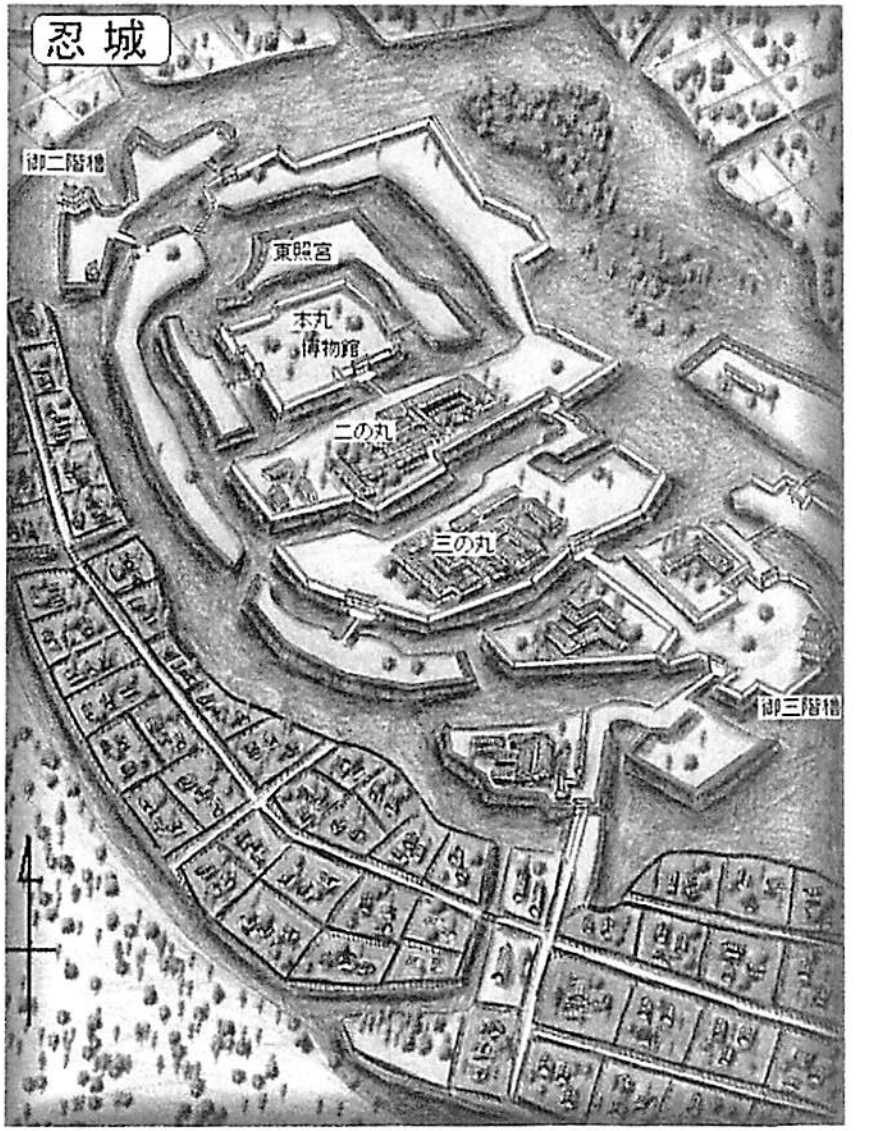
●のぼうの城

歴史小説　著者「和田竜」

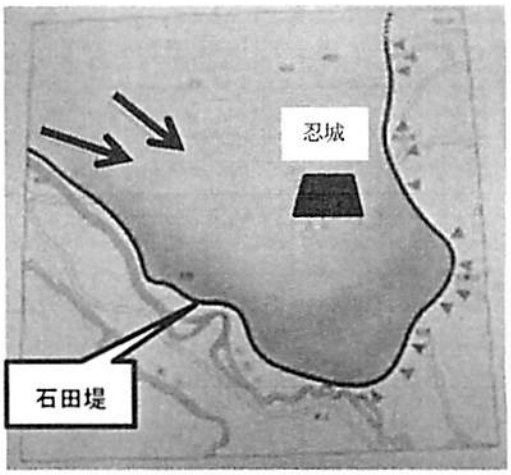
映画　　平成二四年（野村萬斎主演＝成田長親）配給：東宝他

忍城と水攻めの忍城





石田三成と石田堤



石田堤史跡公園の石田堤（埼玉県鴻巣市袋地区）
わずか１週間で築堤。延長２８ｋｍ、高さ３．２ｍ、幅９ｍ。現在２５０ｍ残っている。

石田三成の家紋
家紋は九曜紋であるが、陣幕には「大一大万大吉（だいいちだいまんだいきち）」を使用している。
意味：一人が万民のために、万民は一人のために尽くせば、天下の人々は幸福（吉）になれる。

2　荻野吟子（おぎのぎんこ）

●荻野吟子の生涯

（誕生）

・嘉永四年（一八五一）、俵瀬村（現熊谷市）の名主、荻野綾三郎の五女「ぎん」として生まれる。

・荻野家は、俵瀬村の名主の家で、長屋門（群馬県千代田町光恩寺へ移築された。）を構えた豪壮な家であった。

（学問への導き）

・もともと学問好きで、本格的に学び始めたのは、幕末の著名な儒学者「寺門静軒（てらかどせいけん）」が妻沼に開塾した両宜塾（りょうぎじゅく）であった。

（18才） 最初の結婚（明治二年）

・吟子十八才で同じ現熊谷市の名主稲村家の長男貫一郎と結婚。

・夫貫一郎は、熊谷のために多くの功績を挙げた人物であったが吟子との結婚生活は長く続かず、吟子は病気にかかり実家での療養を余儀なくされ、結婚生活二年で協議離婚となった。

（20才） 女医になる決意（明治四年）

・吟子は現東京大学医学部付属病院に入院。

・入院中一時生死をさまようほどの病状となった。病状がら男性の医師に診察される経験に恥辱と屈辱を感じ、せめて同性の医師であったなら同じ病状を持つ女性が救われると、「女医」になる決意を持つ。

（24才） 東京女子師範学校へ入学（明治八年）

・この頃、初めて教員養成を目的とした東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）が設立され、吟子は受験し第一期生として合格する。第一回生七四名。

（29才） 医学校へ（明治十三年）

・卒業後、女性皆無の医学専門学校（私立）へ男装して通学したといわれる。

・卒業後、医者になるためには医術開業試験を受けなければならず、ここでも女性の受験は皆無で、ここから悪戦苦闘の戦いが、不屈の請願がはじまる。

（35才） 日本最初の女医誕生（明治十九年）

・外国事情や吟子をはじめ国内の運動などにより、医術開業試験の規則（女性も受験可）が明治十七年に改正され、吟子を含む四人が受験した。優秀な成績で吟子一人が合格。続けて後期試験も合格し、医籍登録されてついに日本最初の女医が誕生。

（35才） 荻野医院開業（明治十九年）

・早速開業にとりかかり、小さいながらも本郷三組町の家に「産婦人科　荻野医院」の看板を掲げる。

・マスコミの日本最初の女医誕生が報道され、患者が日に日に増えて、やがて下谷西黒門町に二階建ての大きな家に移る。

（40才） 第二の結婚（明治二十四年）

・その後吟子はさまざまな社会運動にも奮闘し、またキリスト教に入信することになる。

・明治二十四年、キリスト教を通じ同志社の学生志方之善（しかたゆきよし）と再婚する。吟子四十才・志方二十七才。

（41才）北海道へ（明治二十五年）
・夫志方之善、キリスト教徒による理想郷をめざし北海道に渡り、吟子も遅れて渡道し夫の伝道に協力。
（47才）北海道で開業（明治三十一年）
・北海道の瀬棚に移り、ここで産婦人科・小児科医院を開業。
（58才）北海道を引上げ再び東京で開業（明治四十二年）
・吟子五十四才で夫を病死で亡くし、三年後北海道を離れ再び上京して東京本所新小梅町に医院を開業。また志方姓をはなれ荻野家に復籍する。
（63才）永眠（大正二年）
・大正二年、脳卒中で倒れ、波瀾多き一生を閉じる。
・墓所　雑司ヶ谷霊園

●記念館
・平成十八年、熊谷市俵瀬の「生誕の地史跡公園」に生家の長屋門を模して開館。
・今年は荻野吟子没後百年にあたる。

埼玉ゆかりの三偉人

荻野吟子

たゆまぬ努力の結果、日本で初めての公許登録女医となった。（熊谷市）

塙保己一（はなわほきいち）

自らの盲目の障害を乗り越え、「群書類従」の編纂などを行った。（本庄市）

渋沢栄一

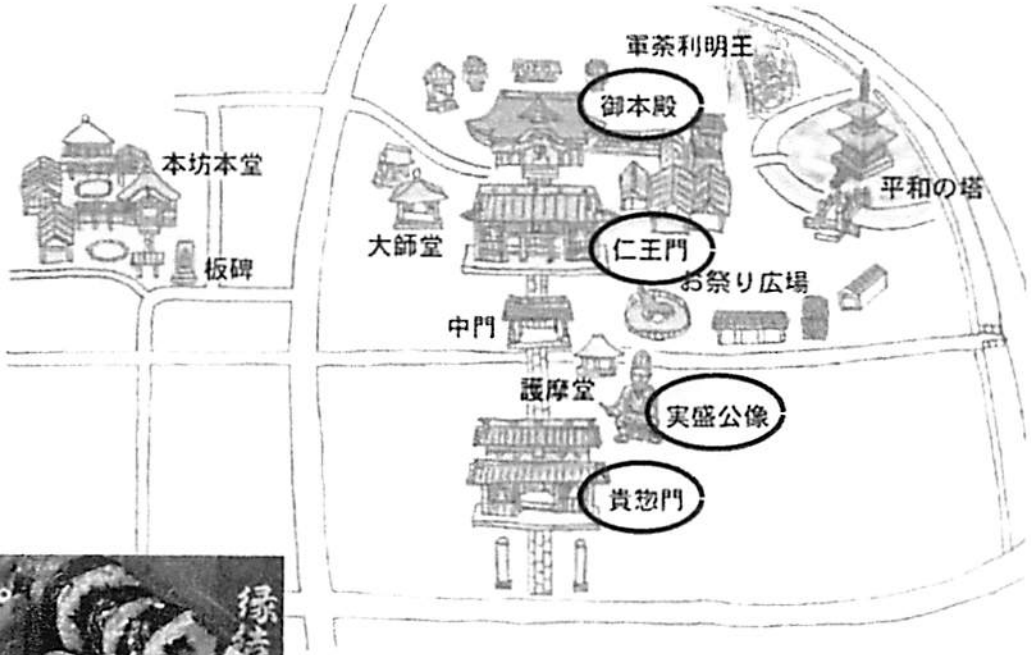
企業の育成や社会事業に尽力し近代日本の礎を築いた。（深谷市）

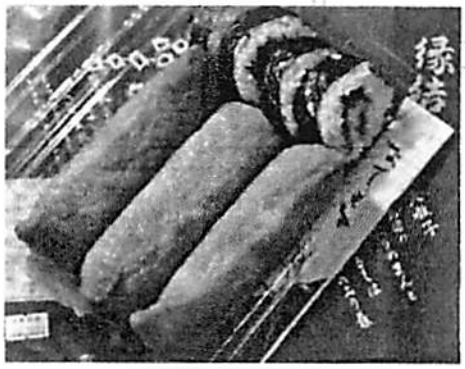
明治十六年、日比谷に造られた社交場「鹿鳴館」の影響を受け当時の流行スタイルで撮った写真。

3

妻沼聖天山歓喜院（めぬましょうでんざんかんぎいん）

（高野山真言宗）





聖天いなり(細長い稲荷寿司)

●聖天さま

・妻沼聖天山は平家物語・保元物語・源平盛衰記・謡曲実盛・歌舞伎実盛物語などに武勇に勝れた義理人情に厚い人柄が称えられている、斎藤別当実盛公が、当地の庄司（村役人の長）として、ご本尊聖天様を治承三年（一一七九）にお祀りしたのに創まる。

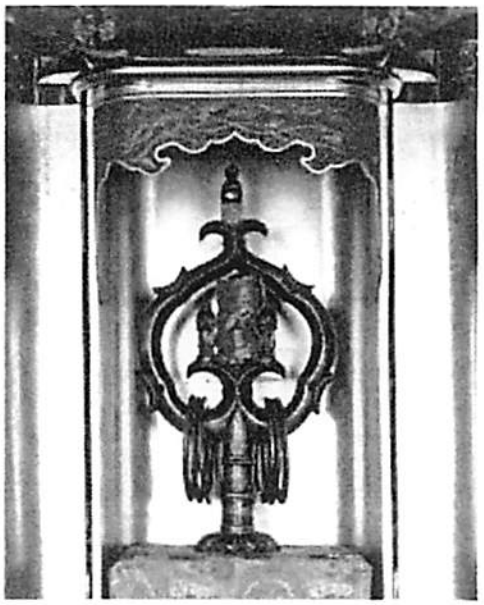
・次いで実盛公の二男斎藤六実長が出家して阿請房良応となり、建久八年（一一九七）に本坊の歓喜院を開創した。

・本尊は聖天さま。「大聖歓喜自在天」の略で「大聖歓喜天」「歓喜天」ともいい、仏教守護神の一で、もとはヒンズー教の神であったがのち仏教に帰依。人身象頭で、二天が抱擁しあう像が多い。

聖天さま（抱擁し合う人身象頭二天）

縁結びの霊験あらたかで、夫婦の縁はもちろんのこと、家内安全・諸売繁盛・厄除け開運・交通安全・学業進学などのあらゆる良縁を結んでもらえる。

・御本尊は錫杖の中央に祀られているので御正体錫杖頭として、国指定重要文化財であるが、秘仏である。



国指定重要文化財（工芸品）「御正躰錫杖頭（錫杖）」建久８年（１１９７）、実盛の外甥が寄進した聖天堂の御本尊で秘仏とされている。

●日本三大聖天

東京都台東区の本龍院（通称　待乳山聖天）
奈良県生駒市の宝山寺（通称　生駒聖天）
右記の二山の聖天に、
埼玉県熊谷市の歓喜院（通称　妻沼聖天）
静岡県小山町の足柄山聖天堂（通称　足柄聖天）
三重県桑名市の大福田寺（通称　桑名聖天）
兵庫県豊岡市の東楽寺（通称　豊岡聖天）
の内のどれか一山の聖天を加えたものとするのが一般的である。

●本殿（聖天堂）

・奥殿・相の間・拝殿からなる廟型式権現造りで、奥殿は八棟造り。建造物の各部材、各壁面を総て彫刻で装飾し、華麗な彩色が施されている。江戸時代中期の貴重な文化遺構である。

・この本殿の建築は、幕府作事方棟梁として活躍した平内政信（へいのうちまさのぶ）の子孫で、妻沼の工匠林兵庫正清の設計によって施工され、細工始めから二十五年の歳月をついやし、その子正信に引継がれ宝暦十年（一七六〇）に完成したものである。

・平成一五年より二三年の八年間を要して保存修理が施され、二四年に国宝に指定された。

・総工費十三億五千万円で、九億六千万円は国・県・市の補助金、三億五千万円が信者の寄附。

●国宝に指定された本殿のみごとな彫刻

七福神の布袋様と恵比寿様が囲碁をし、
大黒様が観戦。

鷲と猿

一見鷲が猿を捕まえているように見えるが、そうではなく、鷲が猿を助けているところ。

木登り上手の猿はその上手さにうぬぼれて、手を滑らせてしまう。下には深い川が渦巻いている。その危機一髪の猿を鷲が助けたところ。猿＝人間　鷲＝聖天様

意馬深遠（いばしんえん）

人間は妄念や煩悩が激しく、心の乱れが抑えられないのを、奔馬や野猿が騒ぐのを抑えがたいさまにたとえた語

●**貴惣門**（国指定重要文化財）

・当山の惣門である「貴惣門」は、山口県吉川藩の作事方奉行長谷川重右衛門の秘伝を受け、林門左衛門正道の手により弘化四年（一八四七）に起工し、嘉永四年（一八五一）に竣工した。

・妻側から見た破風の形が大坂市・岡山市・弘前市を含めて全国に四カ所しかないという三ツの破風が特色である。様式の定型化する江戸末期にあって奇抜な意匠を採用したことは貴重である。

●**斎藤別当実盛公**

・越前に生まれ、十三才の時、長井庄（現妻沼）の庄司（村役人の長）斎藤直実の養子と成り、武蔵武士として数々の功をあげる。

・一一五六年（保元元年）天皇と上皇の対立に、源氏・平氏・藤原氏が同族入り乱れての戦い。実盛公は熊谷直実・畠山重能ら坂東武士と共に、源氏に従う。

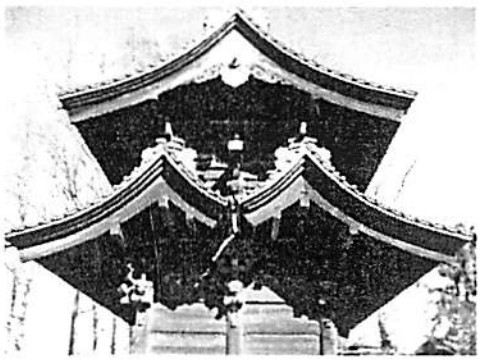
・一一五九年（平治元年）平清盛の策略に源氏は破れ、長井庄に帰る。長井庄は清盛の二男宗盛の領地となる。実盛は長井庄でのこれまでの功績が認められ、平宗盛の家人となり、以前のように長井庄の庄司となる。領内の繁栄を願い、一一七九年総鎮守として聖天宮を建立。

・一一八三年（寿永二年）、源頼朝の挙兵で平氏の恩に報いるため、平氏として戦い、この年、源氏のかつて命を助けた木曽義仲と戦う（篠原の戦い）。実盛公は年老いた武士とあなどられないよう白髪を墨で黒く染め戦うも、木曽義仲の源氏勢に押され、最後尾でただ一騎ふみとどまり防戦したが壮烈な討死をする。享年七三才。実盛公は最後まで名を名乗らなかった。

・後、名を名乗らなかった武士が、以前命を助けてもらった実盛公であったことに気が付いた義仲は、命の恩人の無惨な最期に泣崩れたという。この壮烈な戦いの悲劇は、後に「平家物語」・歌舞伎「実盛物語」・謡曲「実盛」など、数多く語り継がれている。

貴惣門

手鏡を見ながら髪を染めている実盛公



貴惣門の妻面（三つの破風を持つ）

4　渋沢栄一

●栄一の概略

・渋沢栄一は、天保十一年（一八四〇）、現在の深谷市血洗島（ちあらいじま）の農家に生まれた。二十四才のころ、徳川幕藩体制に疑問を抱き尊王攘夷運動に加わったが、その後一橋家および幕府に仕え、慶応三年（一八六七）、第十五代将軍徳川慶喜の名代徳川昭武（あきたけ）（水戸藩最後の藩主＝徳川斉昭の十八男＝慶喜の異母弟）に随行して渡欧。約一年滞在する中で、ヨーロッパの進んだ思想・文化・社会などを目のあたりにし、大きな影響を受けた。

・明治元年十一月に帰国した後、大隈重信の説得により明治新政府の大蔵省に仕え、財政の整備にあたったが、大久保利通らと財政運営で意見が合わず辞職。

・以後は一般社会で実業界の最高指導者として活躍。論語の精神を重んじ、「道徳経済合一説」を唱え、各種産業の育成と多くの近代企業の確立に努め。

・第一国立銀行（→第一銀行→第一勧業銀行→みずほ銀行）創立をはじめ、設立に関わった企業は五〇〇にも及んだ。また六〇〇以上の社会公共事業に関わるとともに、昭和六年に亡くなるまで、国際親善にも貢献した。　墓：東京谷中霊園

●栄一と人形交換親善交流

・昭和に入り、アメリカにおける日本移民排斥運動など、日本とアメリカとの関係が悪くなってきたことに心を痛めていた栄一のところにかねてから親交のあったギューリック博士から人形による国際交流を行い日米友好の仲立ちを図りたいという依頼があった。

・栄一は政府と連携して「日本国際児童親善会」を組織し、米国から12，739体の「青い目の人形」が届き、日本各地の小学校に送られた。後に、日本から58体の日本人形が米国に送られた。

・現在「青い目の人形」は埼玉県内の小学校などに12体（全国で270体余）が保存されている。越谷には大沢小学校の校長室に2体ある。（戦前は6体越谷に配分された）

●栄一と富岡製糸場

・殖産興業を進める明治政府は貿易による外貨獲得のため、模範的な様式製紙工場の建設を計画した。明治五年、設置主任栄一らの主導のもと、フランス技師ブリュナを迎え富岡市に建設された。

●栄一と日本煉瓦製造会社

・「レンガのまち深谷」のレンガ史は、渋沢栄一が明治二十二年に作った日本煉瓦製造会社の工場に始まる。ドイツ人技師を招いて操業を始めた。

・現存するホフマン輪窯（わがま）6号窯は、ドイツ人ホフマン考案の煉瓦焼成窯（明治四十年製造）で、月産65万個の製造能力があった。（写真後掲）

・ここで作られたレンガは、法務省・日本銀行・東京駅・東京裁判所・赤坂離宮・警視庁・東京大学・横浜開港記念館などに使われた。

・またここで製造したレンガは、当初利根川の舟運から後に深谷駅まで4．2キロにわたる引き込み線が敷設され、途中の川に架けられた鉄橋はレンガ脚プレートガーダー橋として現存する日本最古（明治二十八年）のもで、大切に保管されている。（写真後掲）

●渋沢栄一記念館

・渋沢記念館は、日本近代経済社会の基礎を築き、生涯「道徳経済合一説」を唱え、実業界のみならず社会公共事業、国際交流の面においても指導的役割を果たした渋沢栄一（天保十一年＝一八四〇～昭和六年）の全生涯にわたる資料を収蔵、展示している。

・平成十年増設、開館した史料館本館に隣接する旧渋沢庭園は旧渋沢邸の一部で、国の重要文化財に指定された二つの建物、「晩香蘆」「青淵文庫」が庭園とともに当時のままの姿で残っている。

渋沢栄一記念館

渋沢の生地
「血洗島（ちあらいじま）」地名のいわれ

・市の北側を流れる利根川には大きな中州がたくさんあり、当時の北条氏と上杉氏の激戦で多くの将兵の血が流された説。

・利根川が毎年氾濫し地面が荒れるので地荒れ（ちあれ）という言葉が言われるようになった説。

・赤城の山霊が他の山霊と戦って片腕をひしがれ、その傷口をこの地で洗ったという説。

・八幡太郎義家の家臣が戦いで切り落とされた片腕を洗ったことからその名がついた説。

●国立銀行

・明治五年、国立銀行条例が発布され、渋沢栄一が全国で最初の国立銀行を設立。其の後もこの条例のもと民間によって数多くの国立銀行が設立され、全国に一五三の国立銀行が設立された。

・一八八二年（明治十五年）に中央銀行である日本銀行が開設されると、貨幣発行権がはく奪され普通銀行となり、紙幣発行は唯一日本銀行のみが行うようになった。

・ほとんどの国立銀行が現在統廃合され名前を換え、当時の銀行名を残すのは六行のみとなった。

（統廃合の例）

第一国立銀行（東京）→第一勧業銀行→（現）みずほ銀行
第二国立銀行（横浜）→横浜興信銀行→（現）横浜銀行
第三国立銀行（東京）→安田銀行→富士銀行→（現）みずほ銀行
第四国立銀行（新潟）→創立時の商号のまま現存する最古の銀行
第五国立銀行（大阪）→浪速銀行→十五銀行→帝国銀行→三井銀行→さくら銀行→（現）三井住友銀行

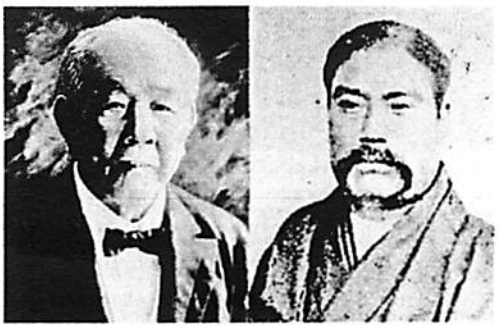
（創立時の商号のままの銀行）

第四　国立銀行　現第四（だいし）銀行　（新潟市）
第十六　国立銀行　現十六銀行　（岐阜市）
第十八　国立銀行　現十八銀行　（長崎市）
第七十七国立銀行　現七十七（しちじゅうしち）銀行　（仙台市）
第百五　国立銀行　現百五銀行　（津市）
第百十四国立銀行　現百十四銀行　（高松市）

TBS（日本史探究スペシャル）「ライバルたちの光芒」より

渋沢栄一VS岩崎弥太郎

（1840～1931）　　（1834～1885）



渋沢栄一　　岩崎弥太郎

幕末の革命期を過ぎて、明治という新たな時代をどうはじめるのか。日本をどのような国家にしていくのか。この問いに挑んだ二人の男たちがいました。ひとりは、合本主義をもって経済と道徳を起点に日本経済を築いた渋沢栄一。もうひとりは、徹底した独裁主義で三菱を築き上げた岩崎弥太郎。ふたりはやがてその手法の違いから真っ向から対立します。
はたして、二人が日本にもたらしたものとはなんだったのか？今回は渋沢栄一 VS 岩崎弥太郎のライバル対決に迫ります！！

一転した若き日のふたり…

渋沢栄一は経営農民と呼ばれる農家の家に生まれました。藍玉の製造・販売などをする裕福な家庭でした。しかし武士との階級の差別は強く、栄一は武士に対する反発心を募らせます。そうして、尊皇攘夷に目覚めるのです。
一方の岩崎弥太郎も土佐に生まれ激しい階級差別に晒されます。弥太郎は勉学に励み出世を夢見ていました。
栄一は幕府の役人に目をつけられ逃れる回る日々。やがて知り合いを頼りに一橋家に仕えます。そして、その一橋家の主君、慶喜が突如として将軍となったことから栄一は倒幕から一転、幕臣となるのです。
一方の弥太郎は坂本龍馬などの活躍で土佐藩が倒幕へ動き、佐幕から倒幕へと一転します。

日本の舵取りはどちらの手に…

幕臣となった栄一はパリ万博に随行し海外の文化に触れます。そこで合本主義に出会います。帰国した栄一は資本を集め多くの企業を立ち上げてゆきます。そんな時、栄一とは異なる手法で実業界に新風を巻き起こす男がいました。それこそが岩崎弥太郎。徹底した独裁主義で三菱を立ち上げ海運業界を制覇して行くのです。

道徳か利益か！泥沼の死闘！

栄一は弥太郎の独裁主義に危機感を覚え、ついに三菱に対抗すべく巨大海運会社を立ち上げます。ここにふたりの死闘が始まるのです。果てしない運賃引き下げ競争、速力の競い合いなどともに倒産寸前までふたりは争います。この戦いは弥太郎の死によって終結。
政府は両社を合併し日本郵船を設立。栄一はその後も無数の企業を設立し「日本資本主義の父」と称されました。
道徳をもって経営する栄一。利益追求を第一とする弥太郎。このまったく異なる二人の実業家が同じ時代にいなければ日本の資本主義は生まれなかったのかも知れません。はたして、真の勝者はどっちだったのか！？

5　渋沢栄一生家

●「中の家」の歴史

・渋沢一族はこの地の開拓者の一つとされるが、分家して数々の家を起し、渋沢家の住宅として使われた通称「中の家」もその一つで、この呼び名は各渋沢家の家の位置関係に由来する。代々当主は市郎右衛門を名乗る。

・中の家は代々農業を営んでいたが、「名字帯刀」を許され、栄一の父の時には養蚕や藍玉づくりとその販売のほか、雑貨屋・質屋業も兼ねてたいへん裕福であった。この家に日本の近代資本主義の父と呼ばれる栄一が生まれた。

・現在残る主屋は明治二八年に建てられ、主屋を囲むように副屋・土蔵・正門・東門が建ち、当時の東武蔵における養蚕農家屋敷の形をよくとどめている。

・昭和五八年からは「学校法人青淵塾渋沢国際学園」の学校の施設として使用され、多くの外国人留学生が学んだ。平成十二年、同法人の解散に伴い深谷市に帰属した。

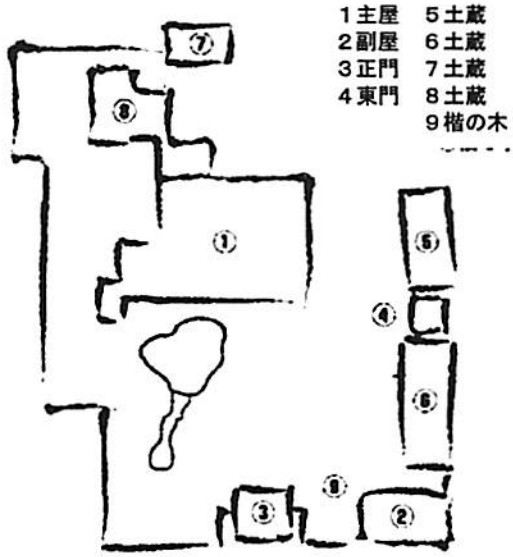
・元治（栄一の妹の長男）

　勃興期の電気事業において、電気事業法の確立に貢献し、名古屋帝国大学の初代総長など、教育界に功績を残した。

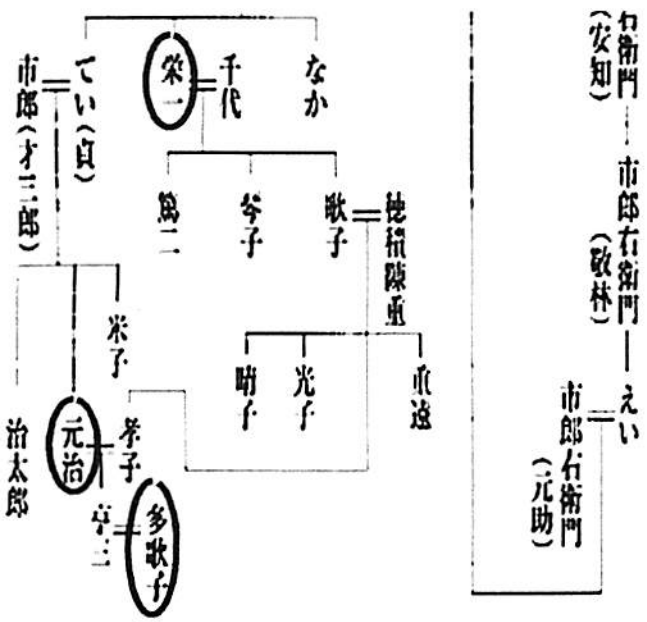
・多歌子（元治の長男の妻）

　昭和五十八年、外国人留学生の日本語及び日本文化研修施設「学校法人青淵塾渋沢国際学園」を設立。平成十二年同法人解散まで、四三か国、六七九人の留学生が学んだ。

「中の家」配置図



「中の家」略系図



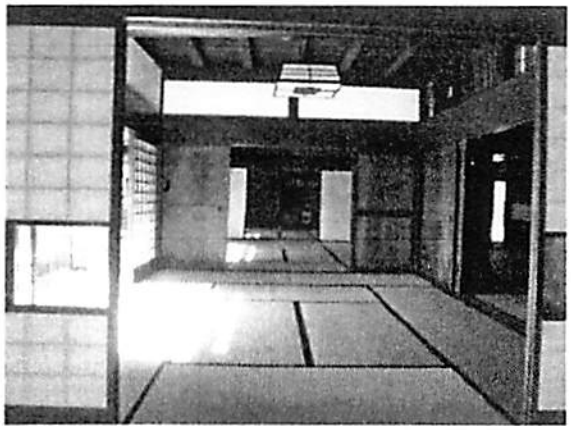
渋沢栄一の生家

「青淵（せいえん）翁誕生之地」の碑

青淵：栄一の雅号
生家の近くに「上の淵」（かみのふち）と呼ばれる青々とした深い淵があったことからこの淵にちなんで命名されたと云。

現在の主屋は、市郎（栄一の義理の弟）により明治２８年に建築され、屋根に「煙出し」と呼ばれる天窓のある典型的な養蚕農家の形を残している。

正門
この正門は東門とともに薬医門（本柱の後方に控え柱を立て、その上に女梁（めうつばり）・男梁（おうつばり）をかけ、切妻屋根をのせた門）の造り。正門の扉はケヤキの一枚板で作られているが、これは栄一の義理の弟市郎が、この地方の大木を探し求め、時間をかけて一枚ずつ集めたものと云う。
門をくぐると右わきに楷（かい＝子貢が師の孔子の墓に植えたと伝えられ、皮に銭を並べたあがある＝孔木）の木がある。



主屋も十畳間は、帰郷する栄一のために市郎が特に念入りに作らせたと伝えられる。

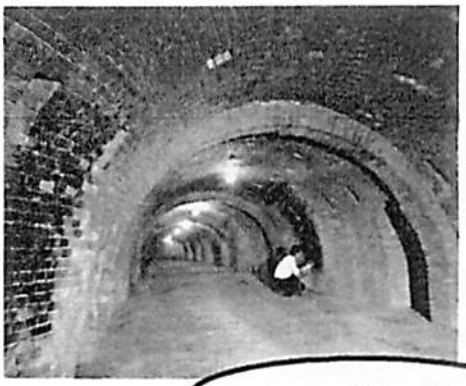
侍姿の栄一翁

渋沢栄一年表

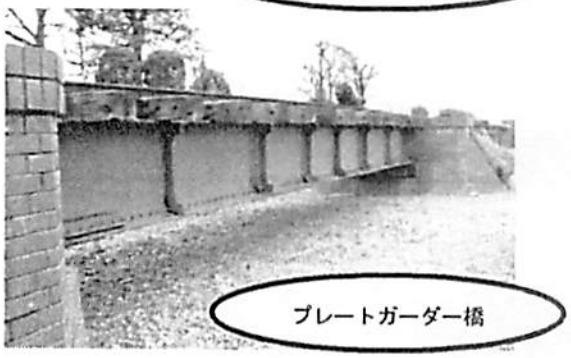
西暦	年齢	主なできごと	備考
1840		2月13日、武蔵国榛沢郡血洗島村（現深谷市）に市郎右衛門、えいの子として生まれる	アヘン戦争
1858	19	尾高惇忠の妹、ちよと結婚（ちよ18歳）	日米修好通商条約締結
1863	24	高崎城乗っ取りを計画するが、尾高長七郎（惇忠の弟）の説得により中止。京にのぼる	世界初の地下鉄開通
1864	25	一橋家の用人平岡円四郎のはからいで喜作とともに一橋家に仕官する	
1867	28	将軍徳川慶喜の弟昭武に従いフランスのパリ万博に随行	大政奉還
1868	29	フランスより帰国。一時静岡藩に仕える	明治に改元
1869	30	明治政府に仕官。租税正となる	版籍奉還
1870	31	官営富岡製糸場設置主任となる	
1873	34	大蔵省を辞任し、第一国立銀行総監役となる	地租改正
1874	35	養育院の事務をつかさどる	台湾出兵
1882	43	妻ちよ死去	日本銀行開業
1883	44	伊藤兼子を妻に迎える	
1885	46	東京府の経営廃止条例の決定により、養育院の存続に努力する	伊藤博文初代内閣総理大臣
1887	48	深谷市に日本煉瓦製造会社の工場開業	
1900	61	男爵を授けられる	
1901	62	日本女子大学校開校。会計監督となる	
1902	63	アメリカ及びヨーロッパ諸国を兼子夫人と共に訪問し、国際親善につとめる	日英同盟
1909	70	渡米実業団の団長としてアメリカに渡る	
1914	75	中日実業株式会社の設立を機に中国を視察し、親善につとめる	第一次世界大戦
1916	77	実業会から引退し、社会公共事業に尽力する 血洗島諏訪神社に拝殿を寄進する	
1920	81	子爵を授けられる	国際連盟成立
1921	82	ワシントン軍縮会議の視察をかねて渡米し、平和外交を促進する	
1923	84	関東大震災が起こり、大震災善後会副会長となる	
1927	88	日本国際児童親善会長として、日米の人形の交換につとめる	日本初の地下鉄開通
1929	90	宮中に参内、御陪食の光栄に浴する	世界大恐慌
1931	92	11月11日永眠	満州事変

深谷市のレンガ　（国指定重要文化財）

栄一が興した地元唯一の会社「日本煉瓦製造会社」１２０年の歴史をもつが、廃業から市が渋沢栄一の功績を考え引き取る。上写真元事務所を史料館に。



ホフマン輪窯６号窯



プレートガーダー橋

地名由来

行田市　　［Ｓ２４年忍市、同年即時行田市改称　８万３千人］

そもそも忍城は「忍氏」が居城していたが、15 世紀後半に成田氏が奪取しそちらへ移った。ちなみに、「行田」の地名の由来は、この「なりた」からきている。すなわち、「成田」→「行田」（なりた）→「行田」（ぎょうだ）である。

市制施行の時、「忍市」（おしし）であったが、「し」が２つ続いて発音も妙なため、同年即刻ボツになったということです。この行田市に建つのが「忍城」。「成田城」ではなく「忍城」と呼ばれているのは、成田氏以前に居城していた「忍氏」から由来している。

熊谷市　　［Ｓ８年（川越市に次ぎ２番目の市）　２０万人］

熊谷という地名の由来はいくつかあるらしいが、どの説であっても、平安時代後期には既に地名となっていたということは間違いなさそう。

・一つ目は熊谷直貞（当時の平直貞。熊谷次郎直実の父）という人がいて、この人、なんとこの地域に存在した熊を退治したといわれる。ただし、直貞さんが熊谷という姓を名乗るようになったのは熊谷が地名となった後のことからすると・・・・？。

・次に、神谷（くまけや）より。高城明神の鎮座によるものという説。つまり、谷に高城明神があったからということなのか。神の谷から方言かはわからないが「くまけや」となり、更に「くまがや」ということになったとか。

・最後は曲谷（くまがい）からという説。この地域において荒川が大きく蛇行し、曲がりくねっていたことから曲谷呼ばれたとのこと。

深谷市　　［Ｓ３０年　１４万人］

「深谷」という地名の由来についてはいくつかの説があり、現在のところ定説はない。

・上野台（うわのだい）などの荒川扇状地にできた台地下の谷に、太古の利根川が氾濫を繰り返してできた低湿地から「深谷」と呼ばれるようになったという説。

・その低湿地に繁茂した萱（かや）が折り重なる「伏萱」（ふせがや）が転訛（本来の言葉がなまって変わる）し、「ふかや」となったという説。

・「深谷」という地名が史実的に初めて登場するのは、室町時代の康応 2 年（1390）、深谷上杉氏の祖上杉憲房（のりふさ）が、庁鼻和（こばなわ）城（現在の国済寺）内に、国済禅寺を創建したと、奉納した鐘に書かれている。

熊谷直実（くまがいなおざね）（武蔵武士の両雄　畠山重忠（はたけやましげただ）と熊谷直実）

・熊谷直実は、平安時代末期から鎌倉時代初期の武蔵国熊谷郷（現埼玉県熊谷市）の武将。熊谷直貞の次男。

・熊谷氏は桓武平氏・平貞盛の孫・維時の六代の孫を称するが、武蔵七党の私市党、丹波党の分かれともされ、彰かではない。直実の祖父盛方が勅勘をうけたのち、父直貞の時代から大里郡熊谷郷の領主となり、熊谷を名乗った。平家に仕えていたが、石橋山の戦いを契機として源頼朝に臣従し御家人となる。一ノ谷の戦いでは義経軍の奇襲部隊「鵯越の逆落し」で下り、平家の陣に一番乗りを果たす。

・のちに出家して法然上人の門徒となり蓮生（れんしょう / れんせい）と号した。

・「平家物語　敦盛最期」の章段における平敦盛との一騎打ちは、武家の性（さが）や世の無常観を表現する題材として後世武士の間で非常に好まれ、直実は敦盛とともにこの故事の主人公として能の演目『敦盛』、幸若舞の演曲『敦盛』をはじめ様々な作品に取り上げられている。

・越谷の安国寺：越谷大泊の浄土宗安国寺は、熊谷蓮生（直実）の修行草庵であったと伝う。
　　また本尊は蓮生法師の守仏と伝わる。

・越谷の念仏橋：京都から安国寺に来るとき、法然上人に尻を向けられず後ろ向きに馬の乗って着た。念仏橋を渡る時仏様を落としそうになり思わず「南無阿弥陀仏」と拝んだことから「念仏橋」という。

・墓　　：熊谷市の熊谷寺（ゆうこくじ）

参考資料

・「城絵図と忍城」	行田市郷土博物館
・「博物館見学のしおり」	同右
・「行田市文化財マップ」	行田市教育委員会
・荻野吟子（荻野吟子没後百年記念事業）	熊谷市教育委員会
・「妻沼聖天山」ガイドブック	熊谷市
・「渋沢栄一翁」	熊谷市
・「深谷の煉瓦物語」	日本煉瓦史料館
・外各種パンフレット	